

着衣着火に注意してください!

着衣着火とは…

- ・コンロで調理中に近くの物を取ろうとした際に、衣服に火がついた。
- ・仏壇のローソクに火をつけ、お供え物を取ろうとした際に、衣服に火がついた。
- ・たき火をしている最中に、火が風であおられて、衣服に火がついた。

など、**身に着けている衣服に火がつくこと**です。

衣服に火がついても、すぐに気付かないケースもあり、重度のやけどや死亡にまで至ることも多く、大変危険なものです!!

【参考】

衣服の素材は、綿、絹、ポリエステル、アクリル、羊毛、ナイロン、または、それらの素材の混紡などがあり、火がついたときの燃え方も様々です。

その中でも特異な燃焼として、生地表面を火が瞬間的に走る「表面フラッシュ現象」があります。「表面フラッシュ現象」は、綿やレーヨンなどの毛羽のあるものに発生しやすくなっています。



着衣着火の発生状況

全国的に見ると住宅火災による死者数(放火自殺者を除く。)は約 1,000 人で、そのうち着衣着火により亡くなられる方が毎年 100 人前後おられるのが現状です。

豊中市内でも、年に 1~4 件着衣着火による火災が発生しており、それらの方は全員がやけど、場合によっては亡くなられた方もおられます。



着衣着火を防ぐために

- 火を扱うときは、袖が広がっている服などのルーズな服は着火しやすいので避けましょう。
- 調理の際に、燃えにくい服やエプロン、アームカバーなどの防災製品の着用も考えましょう。
- 高齢者や子どもが関係して発生する場合もあるので、周りにも十分注意しておきましょう。
- 電気ストーブなど直接火が見えないものでも、近寄りすぎて重症なやけどを負ってしまうこともあるので、注意しましょう。

衣服に火がついてしまったら…

すぐに水をかぶって火を消してください。水道水でも浴槽の水でも飲み物でも、とにかく近くにある水をかけて消してください。

近くに水がない場合は走り回らないでその場で転げまわって、燃えているところを体で地面に押し付けるようにして消してください。

やけどしてしまったときは、すぐに水道の流水で冷やしていただくとともに、消防署(119番)へ通報して、対処方法の相談や救急車の要請などをしてください。